

## 中期密教に至る灌頂儀礼の発展過程

はじめに

本論文の課題は、初期密教から『大日経』に至るまでの灌頂儀礼の変遷を辿り、新たに付加されてきた要素や思想がいかなるものであるのかを検証し、初期密教から中期密教への発展・展開の過程を、灌頂儀礼という視点から考えようとするものである。

後期密教では、灌頂儀礼に四段階を立て、その第一段階を瓶水灌頂と称しており、初期から中期密教における灌頂儀礼は、この瓶水灌頂の段階に相当すると考えられている。そのため、一連の儀礼の構造や、灌頂の実践意義は明らかになりつつあるが、瓶水灌頂という名のもとに一括りにされ、各経典に説かれる瓶水灌頂の方法については論じられていないと言える。

さらに、本研究の該当分野に対する研究そのものが少なく、初期から中期密教に至る過程で見過ごすことの出来ない『陀羅尼集経』と『蘇悉地経』に対する灌頂儀礼の考察がなされていない状況にある。

そこで『大日経』以前の成立と考えられおり、なおかつ七日作壇法が説かれる以下の四つの経典を主な研究対象とした。

- (1) 『陀羅尼集経』
- (2) 『蘇悉地経』
- (3) 『蕤呬耶経』
- (4) 『金剛手灌頂タントラ』

そして、それぞれの経典に対して「1. 灌頂儀礼の目的」、「2. その目的を果たすための灌頂儀礼の構造」、「3. その灌頂に用いられる曼荼羅の構造」、「4. その目的を果たすための瓶水灌頂の方法」という四つの視点から考察した。

### 第一章 『陀羅尼集経』の灌頂儀礼について

『陀羅尼集経』は、七日作壇法による灌頂儀礼が説かれる最初期のものであり、初期から中期密教にかけての七日作壇法の基本構造が把握できると考えられるため、第一章で取り上げた。『陀羅尼集経』は全十二巻からなり、各巻に別の経典が収録されている。全体に目を向けると、灌頂儀礼を含め様々な密教儀礼を確認できるが、本論文では詳細な七日作壇法が説かれる第四巻『十一面観世音神呪経』と、第十二巻『仏説諸仏大陀羅尼都会道場印品』に注目した。『陀羅尼集経』に見られる七日作壇法は、既に基本構造が整っていると言えるが、残念ながらどのように導入されたかは明らかでない。また、両者に見られる灌

頂儀礼を対照した結果、第十二巻の灌頂儀礼は、第四巻の灌頂儀礼を基に、『陀羅尼集経』の他の巻に説かれている儀礼を取り入れた構造であることが指摘できた。

一連の灌頂儀礼の次第を見ると、その目的は弟子が新たに曼荼羅に入り、自らの本尊を決定するための灌頂儀礼と言える。その為に造壇される第十二巻の曼荼羅は、東方に仏部、北方に蓮華部、南方に金剛部、外院に諸天を配置する三部立ての構造を基本としつつ、諸尊を仏・般若・蓮華（菩薩）・金剛・諸天の五つに分類している。これは『陀羅尼集経』全体の構成を表すような尊格の配置といえる。瓶水灌頂に関しては、弟子が投華得仏によって結縁した本尊の印と真言で行われる。即ち、結縁の本尊の印を結んで頭上につけ、その印中に投華で用いた華を置き、結縁の本尊の真言を誦しながら灌頂が行われる。

## 第二章 『蘇悉地経』の灌頂儀礼について

第二章では、『蘇悉地経』の灌頂儀礼を取り上げた。『蘇悉地経』では、成就法を始める時には、先ず資具を集め、次に護摩を行い、そして灌頂を行ってから成就法に着手することが説かれている。このことから本経の灌頂儀礼は成就法と関わりのあるものと言えるであろう。まず曼荼羅に関しては、三部立ての曼荼羅であり、特に三部ごとに、部主・部母・部心といった尊格を中心として配置される。この曼荼羅の特徴は、中尊は受者の所持する真言尊が属する部族の部主尊であり、その前に、受者が所持する真言尊を安置するところにある。すなわち、曼荼羅の中尊の前に、成就させたい自身の本尊を安置するのである。またこのことから、本経の灌頂の受者は、既に自身の本尊が定まっていることが推測される。そして、この曼荼羅に対して七つの瓶が配置され、それぞれ異なる真言によって加持される。瓶の配置と、対応する真言をまとめる以下の表の如くである。

瓶	漢訳	蔵訳
①本尊の前	本尊の真言	自身の尊の真言
②曼荼羅の中心	明王の真言	明王の真言
③門の前	軍荼利の真言	金剛忿怒（軍荼利）の真言
④東北の角	部心の真言	部心の真言
⑤東南の角	部母の真言	
⑥西北の角	能弁の諸真言	弁事の真言
⑦西南の角	一切の真言	他の一切の真言

本経では、灌頂に用いる瓶とその瓶を加持する尊格の対応関係が、未熟ながらも構築されていく。しかし、瓶水灌頂を説く場面では、最初は軍荼利の真言により加持した瓶を用いて受者の障碍を取り除き、最後は自身の本尊の真言で加持した瓶によって灌頂を行うことが示されるが、その他の瓶はどうかと言えば、漢訳では「余の二瓶を意に随いて用いよ」と説かれ、蔵訳では「中間に、中間の[真言]等[を誦すこと]によって[灌頂をすべし]」と説かれるのみである。蔵訳ではいくつの瓶を用いるか定かではないが、漢訳に従えば四瓶で、二番目と三番目に関しては定まった規定がないようである。『蘇悉地経』の灌頂儀礼

で確かなことは、最初は受者の障碍を取り除く為に軍荼利の瓶によって灌頂されること、そして最後に自身の本尊であるところの瓶によって灌頂されるということである。これは、成就法が成就していない修法者の障碍を取り除き、改めて自身の本尊によって灌頂を行うことで成就に導くといった役割が考えられる。

### 第三章 『蕤呬耶經』の灌頂儀礼について

『蕤呬耶經』の灌頂儀礼は、經典の内容や灌頂を終えた後の教誡の詞から、阿闍梨位を与えるための灌頂と考えられる。七日作壇法に関しては、既に『陀羅尼集經』に見られたものとほぼ同様の構造である。しかし、受者の菩提心を発することなどの新たな要素や、阿闍梨と受者が共に曼荼羅を画くようになることなど、『陀羅尼集經』と比較した場合の相違点も確認される。

曼荼羅は、『陀羅尼集經』や『蘇悉地經』と同じく三部立ての構造をとる。また、中尊に関しても特定の尊格を指示せず、阿闍梨と受者によって異なるものと考えられる。瓶水灌頂に関しては、漢訳では「根本の真言を誦せ」とあり、藏訳では「全ての根本真言を唱えよ」というように、若干の差異が認められるが、根本の真言によって行われることが理解できる。そこで、ここで用いられる根本真言が、如何なる真言を指し示しているのか検討した。そして、特に藏訳に注目すると、曼荼羅中の全ての諸尊の真言によって灌頂が行われことが予想された。受者がこの灌頂によって阿闍梨になれば、後には当然他の弟子に灌頂を授けることになる。そして、その弟子が入壇した際に、曼荼羅上に画かれた全ての諸尊の印や真言を伝授出来る立場であることが求められる。即ち、阿闍梨位の灌頂において、全ての諸尊の真言によって灌頂されるのは、この灌頂によって阿闍梨となる受者が、曼荼羅上の諸尊を全て成就するためであろう。

### 第四章 『金剛手灌頂タントラ』の灌頂儀礼について

『金剛手灌頂タントラ』に説かれる灌頂は、上記の三つの經典とは異なり、釈迦から普賢への灌頂をモデルにした、阿闍梨から弟子への灌頂儀礼が説かれる。經典中から読み取れる灌頂の目的は、釈迦より伝えられた教説を相承することと、受者がその教説を伝えていく金剛手へと転換することである。

曼荼羅に関しては、中尊の名称が説かれないことから、先行研究において「毘盧遮那」とする説と、「金剛手」とする説があった。しかし、本經の曼荼羅の中尊の記述と、『大日經』「秘密曼荼羅品」の金剛手の記述がほぼ一致することから、本論文では、中尊を金剛手であると推定した。また、『陀羅尼集經』・『蘇悉地經』・『蕤呬耶經』の曼荼羅が、東方に仏部、北方に蓮華部、南方に金剛部の諸尊を配置していたのに対し、『金剛手灌頂タントラ』では、中央に金剛手、八葉蓮華に四方四仏と過去仏、二重に八大菩薩、外院に諸天を配置する構造を取る。そのため、このような諸尊の配置に如何なる意義があるのかを検討し、その配置が金剛手の神通神変であることを指摘した。

瓶水灌頂の場面に目を向けると、宝幢・開敷華・無量光・阿閼の四仏、及び普賢・除一切蓋障・弥勒・地蔵の四菩薩によって加持された瓶水で灌頂が行われる。『陀羅尼集經』や

『蘇悉地經』『蕤呬耶經』の灌頂とは異なり、受者が誰であれ、瓶水を加持する諸尊は定まっているのである。その後は、金剛杵と法輪が授与され、金剛法の演説と、教説を害する者を調伏していくことが使命となるのである。また、新たに曼荼羅に参入する場合や、教説を相承するために、信があることが条件となる。そして、その信の獲得のために金剛明妃を授かることが必要となる。曼荼羅に参入した後に、金剛法の教えから逸脱した場合には、金剛明妃によって焼かれ、頭が破壊されるという『金剛頂經』以降に見られる「誓戒」と同じ役割も見られる。

## 結論

以上のように、七日作壇法が登場してから中期密教に至るまでの間の瓶水灌頂には、それぞれの經典に求められた役割があり、その役割を果たすための曼荼羅の構造と、瓶水灌頂の方法が異なっていると言えることが出来るであろう。瓶と尊格の対応関係は目的に合わせて選定され、その尊格の曼荼羅上における配置も重要な要素であると理解される。

また、『陀羅尼集經』と『蘇悉地經』『蕤呬耶經』の灌頂は、その役割は異なるも、一連の流れとしてみることも出来るであろう。一人の弟子が『陀羅尼集經』の灌頂によって自身の本尊と結縁し、その後成就法を行っていく過程で『蘇悉地經』の灌頂を受け、最後に、阿闍梨となる資格が認められれば、『蕤呬耶經』に説かれる灌頂によって阿闍梨となるのである。

それに対して、『金剛手灌頂タントラ』の場合は、以前に他の灌頂によって自身の本尊が決定していようとも、金剛法の教説を相承し、大金剛曼荼羅に参入する場合には新たな手続きが求められる。また、二通りの曼荼羅に入る方法が示されることと、投華得仏の後に弟子が阿闍梨への布施を行い、その後改めて灌頂壇を建立して灌頂を行うという次第の構成を考えると、本来は二段階であった儀礼を、一つの次第にまとめあげたと考えることも可能であろう。『金剛手灌頂タントラ』において、一つの經典のなかで曼荼羅の参入から阿闍梨位までの流れが完結し、この經典を相承する為の新たな要素が付加されたと考えられる。さらに、『金剛手灌頂タントラ』より、受者を特定の尊格へと位置付ける動きが見られた。

このように、第一章から第四章までの流れを踏まえて、灌頂儀礼の変遷過程を示すならば、『金剛手灌頂タントラ』において、灌頂儀礼の役割が受者自身を金剛手へ転換させることとなり、それに伴って曼荼羅の構造や、瓶水灌頂の方法、さらに曼荼羅参入に関する新たな要素が付加されたといえよう。

これに関連して、以下のような推論を行った。松長有慶博士は、初期密教と中期密教の区分に関して、以下の五点を挙げている。1.中期密教では修法の目的が主に成仏となる。2.中期密教に至り三密行が成立する。3.大乘思想の儀軌化が行われる。4.組織的な曼荼羅が成立する。5.教主が釈迦から毘盧舎那になる。このことを踏まえて、改めて『金剛手灌頂タントラ』の灌頂儀礼を振り返ると、灌頂によって受者は金剛手と位置付けられる。また、本論では詳細な部分まで立ち入ることができなかったが、灌頂を授かった者が修法を行うときには、三密瑜伽によって行者自身が金剛手そのものと合一した状態で行う。そして、大塚伸夫博士によって指摘されている通り、本經は『華嚴經』『入法界品』の影響を多

分に受け儀軌化したものと言える。曼荼羅に関しても、『陀羅尼集経』・『蘇悉地経』・『蕤呬耶経』までの三部に基づく諸尊の配置ではなく、中尊である金剛手の神通神変を表している。さらに、経典中では教主である毘盧舍那が登場する。このような背景を考慮すると、本経において中期密教が成立したと考えることも可能であろう。

当然上記のようなことは、『金剛手灌頂タントラ』に見られる三密瑜伽の成立過程をより詳細に論じていく必要があるであろう。また同時に、本経から『大日経』・『金剛頂経』に展開する過程についてさらなる考察が必要とされる。以上のことを今後の研究課題として示し、結論とする。